



阿安永実録

伝

~ 13

3362

4



13
3362
4

一 漢野仙苑の英に内田翁高が
此は極ふし、ふあやう
ゆゑ、松田のふん、あやう

貸性吉屋
卯共衛

阿蘇
英水
實錄
傳卷之四

九百十八
目九
本大學出版部



目錄

一 漢野仙苑の英に内田翁高が
英年善云あし、礼州の事
此は極ふし、松田のふん

情より隆恩ととらへて 卷より田中
左仲氏討んとし隆恩を言ふの状
仲氏細いふ右侍の中より急ぎ表
の裏松山ととらへて切御程と
此松山ととらへて 山業ととらへて
と業のいふんととらへて 隆恩
り成程せんす業より田中
仲氏 仰の思ふ分列する

君の山業ととらへて 隆恩
己が業ととらへて 隆恩
ととらへて 隆恩
隆恩ととらへて 隆恩
隆恩ととらへて 隆恩
隆恩ととらへて 隆恩
隆恩ととらへて 隆恩
隆恩ととらへて 隆恩
隆恩ととらへて 隆恩
隆恩ととらへて 隆恩

悲ひを痛と返さぬ世にありとも
君臣思ひあはれ甲申左仲が指し
沙急を物とすまはれ服も後
うらめし今も又素がたまもあはれ
とけぬ一吐きぬお世の
みねをそとへもあはれ
石垂つごえのまはるまはる
とけぬひとひと人へ徳也

お辰のまはるまはる
とけぬひとひと人へ徳也
相又甲申左仲の徳も
徳とすれは徳もあはれ
何の徳もあはれ
の徳もあはれ
甲申左仲の徳もあはれ

のみ樂之妻此は六橋山中之系替
も致すれ其秋介は秋磨
と云き作らうし下も長成る
修直之石造つ我修直と歌を修
んそ人とくそ見所ふ世友二の
山を切拂ひ花も成枯く我修
直と云くさあんとすもよは
くぬれは長身一は修直と云く

卯多とくくが磨みの掛け
とすも一系色とくく富ひぬ
石伴信人とく六は洞井是の
る系色とく君も修直は
早免と云くと云く四よぞん
火掃りともくく山あり
いもす修直は是の物も修直
る系色とく物も修直は是の物も

かゝる東條氏に在るもの侍衆の切
と兼て一人の徳とめども或他人の
他侍に神を奉りてまじはる
もの原ふすまゝの御去る
と此しるすもあらず今彼が切と
兼て有すもの御まじはる
もの表れ愁ひてぬるもの
後日其のたぬるもの御まじはる

の周旋とぬるもの兼て有すもの
かゝる東條氏に在るもの侍衆の切
と兼て一人の徳とめども或他人の
他侍に神を奉りてまじはる
もの原ふすまゝの御去る
と此しるすもあらず今彼が切と
兼て有すもの御まじはる
もの表れ愁ひてぬるもの
後日其のたぬるもの御まじはる

子よ言ぬの唐れく御まは修業を
りて此に修しよの唐れのりの令
るは出さやしとて結負せん人
有のまゝそ行ひのるんしを更
有りて時を修るれよ一か親
まゝり身とつるも更たてしゆす
きられしにまもせよ多く氏
家れつる御の念よとせよとの

此唐あまもせよ君れ唐もせよ
のるあ仁のまゝ御流るる有れ
ゆの氏御まは修業を修るる
まゝり身とつるも更たてしゆす
きられしにまもせよ多く氏
家れつる御の念よとせよとの

糸のくちを束のけけ切もねん
南附の松智松尾の忠孝とく
足分の伊加藤清中少佐の奥とく
君の伊加藤清中少佐の忠孝とく
ちを束のけけ切もねん
少忠孝とく彼をく威勢強利
ちを束のけけ切もねん
足分の伊加藤清中少佐の忠孝とく
君の伊加藤清中少佐の忠孝とく

信長もや皆君のちのき備願の
少佐の忠孝とく彼をく威勢強利
ちを束のけけ切もねん
足分の伊加藤清中少佐の忠孝とく
君の伊加藤清中少佐の忠孝とく
ちを束のけけ切もねん
少忠孝とく彼をく威勢強利
ちを束のけけ切もねん
足分の伊加藤清中少佐の忠孝とく
君の伊加藤清中少佐の忠孝とく

佛ほとけのおんのたまをうへたるまにままに斗たれし
とままに播はくまよしのまれし法は法は
善ぜんもも稻い田でん九く所しよを傳へしまもも
みみのまみまししるるもも後ご後ごをして
かかししれ

世よ稻い田でん九く所しよを傳へしるるもも後ご後ごをして
おお代だいのまれしのまれしのまれしのまれし
とと年ねんのまれしのまれしのまれしのまれし

のまれしのまれしのまれしのまれし
のまれしのまれしのまれしのまれし
東とう照しやう天てんのまれしのまれしのまれしのまれし
かかのまれしのまれしのまれしのまれし
收しゆのまれしのまれしのまれしのまれし
初しよのまれしのまれしのまれしのまれし
法は法はのまれしのまれしのまれしのまれし
りりのまれしのまれしのまれしのまれし

樂よ修得られ海へ一と柳又入れ
入連したる時、松のよ飛進ひる
れもつる向もきりれ、も万氏の流
る、福の事もつるま、さすね徒
友へ石巻ついで、強欲うれど、
己合の私欲も、お東も、なされ、
この心合、千あり、も万氏の、
た、お女、松の、さ、び、切、拂、ひ、程、の

花も成、極、つ、君、の、心、磨、み、海、も、
も、こ、あ、も、修、友、へ、石、の、よ、念、強、進、
恨、の、柳、の、も、修、友、へ、石、の、よ、念、強、進、
る、式、田、中、へ、仲、の、め、ま、よ、流、石、れ、
金、吾、ら、も、さ、ひ、よ、ん、と、ひ、し、を、
し、ら、の、事、へ、と、修、友、へ、石、の、よ、念、強、進、
も、修、友、へ、石、の、よ、念、強、進、
お、東、へ、石、の、よ、念、強、進、

石巻の石巻家好る形をせし
りる石巻の家一四長なる田中
左伴一とさるいふ海伝る女毛氏
と存るく山松山切拂ひのあは心
御一田中左伴子竹付も酒
一めがく費中とるれ屋を
もめくくし思ふ西村ひ子整く
山洞も好くくかみく田中左伴を

石巻人く伝るるんく形をえ
そんと碑こも今更あふあみ
不人も好くも伝るるるる
く伝るるるるるるるるるる
く伝るるるるるるるるるる
と存るるるるるるるるるる
君一存るるるるるるるるる
その存るるるるるるるるる

申懐甚やこれに由なきに思ひて田
中左伴惣持の儀と書被札せし
向て申文取しと納ふをくみ入
札しと宗札をくしと宗札をく
ふ或百あは宗札ぬしと宗札を
かの宗札の着成と宗札を
為れしと急しと宗札を
相又今もあは宗札ぬしと宗札を

まじしと宗札ぬしと宗札を
しと宗札ぬしと宗札を
まじしと宗札ぬしと宗札を
すあしと宗札ぬしと宗札を
る宗札ぬしと宗札を
しと宗札ぬしと宗札を
しと宗札ぬしと宗札を
貴物すしと宗札ぬしと宗札を

送服も是度もつては相又枝
木切拂の木取位方系素細
裁許し〜千之味とわ〜千方
もお魚の利徳とゆき〜先枝
栲の合ぬは枝は栲也中も
ろき栲水と栲由取と印法木
も栲梁栲木ぬき〜木
ぬ〜と〜ぬ〜枝木〜と〜

志丹比ねひの恵ふは志丹動ひを
ひひや〜相又枝葉に蔭物
取も日回〜ひ〜ひ〜
あ〜と〜里よあ〜と〜是生あ
下生同〜と〜結らんのか
相又里ふあ〜と〜伝木ふみま
のる結〜と〜結らんのか
結実と〜と〜



有も農業の流るはさるる人
農業の流る中へは挿るる
の事々々々々々々々々々々々
お史お史の以て農業もさる
るもさる結集とて改めんとん
扱りの多し御と結集もな
しを附るを考へるも行集
るりりりりりりりりりりり

波房れの着懐流流流流流
かききの波流流流流流流
作りの粉文遊りりりりりり
さるりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりり
万伴が差景の有りあはれ
の階分とて其れれれれれれ
秋のひまひまひまひまひま

のるに里めかへて書きたり枝葉未
の極ふいゆることよきなりてひる
集め書きたりたるは各分の利
徳とひく我れ完と書きたり
たし今と安樂よらふは
只今と仲原の徳細れ徳
かへては是代書きたり
と教せんとは多るの事ありと云持る

田井が書へては徳か君のさげは
りくくる各分の利徳とひるは安
ふらするは徳か君のさげは
と書きたりは是代書きたり
しるは是代書きたり
そ書きたりたるは各分の利
たは是代書きたり
しるは是代書きたり

ふらききおのれは文酒のちゆうとく
人徳のしよもりしはしよとて
運の國中左陣一橋氏文酒のそ
和れを西にさうききて一切文
武とれし中井いふしよとて
小波佐友と名うしよとて
余の武才と貴氏とて

を西にさうききて一切文
武とれし中井いふしよとて
小波佐友と名うしよとて
余の武才と貴氏とて
和れを西にさうききて一切文
武とれし中井いふしよとて
小波佐友と名うしよとて
余の武才と貴氏とて

恙く四拂ひ明れ、明和六年三
月、旬日申、左件、下知、と村、
山家、よ、く、と、觸、と、今、交、大
昔、山、申、た、藤、山、ら、ま、つ、り、
の、越、い、し、申、申、付、く、面、く、不、持、し
た、る、知、知、系、と、た、を、と、一、を、申、や、
花、ぞ、り、と、意、と、一、と、ま、く、い、り、を、と
は、ま、す、一、一、表、又、不、持、是、お、よ、の、

古、山、持、ぬ、決、一、水、の、束、と、一、を、
後、の、を、と、一、一、觸、と、一、セ、リ、
岩、氏、古、今、と、裸、役、と、一、各、
人、又、ぬ、を、と、一、れ、ま、ら、ぬ、申、申、
昔、申、よ、い、と、一、と、一、ぬ、多、を、
持、ぬ、を、と、一、の、代、り、と、一、
持、ぬ、ぬ、今、交、部、と、一、の、觸、
持、ぬ、と、一、と、一、と、一、

よのおおまよらうらうらうらうらうらうら
りる車しんぐるまさく持運もちうんかもろく
山持やまもちよ池いけ下した足あし成なり来きりてお運もちうんひく
御ごよ田た中ちゆう左さ仲ちゆう右う氏し載ざい体たいしてを
あさり梅うめさうお意いよりひひを
り御ご又また天てん后こう法ぽう遠えんき者ものあは
派はいをりゆへ部ぶのあしめりてわる
りよお名なちり蘇そ山さんを来きりてひも

有あの事ことなれに主しゆまをば積しゆく担たんよ
うくくさかきつづの保たもめ
た月つきあけ流ながれと夜よせん田た中ちゆう氏し
ちく作しやくり只ただ謙けんよるんご母はは儀ぎを
すまよ蘇そ山さん成なり乾かんしよひやまき
もあうなるり流ながれ懸けんつんを
人ひと其その母はは志しとて左さ仲ちゆう右う
さうく御ご中ちゆうの蘇そ山さん成なり乾かんしよひを

書く十の所尾花をくまはらび
るはまいつとと極くしの中程よ
り指おしとけあやとあらふひ
其目かたれは重なるか宿るはの家
あやと終日終つて酒喜しく一糸
皆と夜しとて休のりんも
一入具は信しと糸成いさる
重なる酒喜のくまはらびとあらふ

くまはらびとあらふ
ゆれもつとと終つて酒喜しく
自折ることと目相がす
初酒とひれは左仲右はひ
君があらふとと終つて酒喜しく
自折る事と花も一と目
と酒とつれは酒喜と終つて酒喜
始斜とす一と具は信しと終つて酒喜

乃びくし海を人々花登れおゆ
度く井山ふいさう息を借し
うふ相又秋のひら雨れ山と雲
と雲し林葉存ふしうは物紅葉
雄紅葉のうし紅葉紅葉紅葉
紅葉系系一面小極まらしてん度
しうふおふくあふまうし
月十旨飯おふし幕布打也

酒葉しおひらう入紅葉れ
てうおひくしお休れらうし酒の
早う紅葉のらうおひうま葉
紅葉とんらひま葉お目もすま
葉よらひし
ま葉よ紅葉も紅葉れ色葉
輝月紅葉し田分たるん
紅葉しおひらう田中た葉

伝書女部女部集やうりうん

表れあいのりうりうん

手長公まさうりうりうん

あいの九つ附い少白籙有りうりうん

初れごうりうりうん

暮秋たれ少白籙有りうりうん

ひえうりうりうん

あいの初書回うりうりうん

りうりうりうん

難を伝合よりうりうん

中く少くりうりうん

少并うりうりうん

の少少貴とりうりうん

の軍印もりうりうん

少初書りうりうん

少初書りうりうん

何れも心算貴し〜もやあからし事の
す切小美その心算珠をとり〜
事あ中のお〜せの物〜
かつたや物〜お好多く也〜
〜物〜美それ物〜
心算貴し〜せんま〜君小郎
〜心算貴の心算
とびら〜田中左伴五郎

た〜も心算貴し〜
〜心算貴し〜
古物〜心算貴し〜
君よ〜心算貴し〜
半猶田心算貴し〜
〜心算貴し〜
物〜心算貴し〜
形〜心算貴し〜

如る二れ築山とていふ
まゝ今迄と人集はは
國の勢きくも方りては
中五甲車とて概程なる
うねらの事、作事、の
なごし、歩み、西、ぬ、ち、の、れ、其
柘梁とて築山とていふ
在り、海、集、り、て、作、事、

和具、角、く、く、え、ぬ、井、田、中
た、仲、が、ん、底、今、く、た、の、り、氏、者
い、父、母、の、い、ふ、事、は、い、ふ、事、
昔、より、君、の、い、ふ、事、は、い、ふ、事、
と、い、ふ、事、は、い、ふ、事、
い、ふ、事、は、い、ふ、事、
一、旦、ゆ、れ、云、す、ら、い、ふ、事、
事、と、い、ふ、事、は、い、ふ、事、

